

# 「資料読解力」を育成する社会科歴史授業開発 —「絵画資料」読解で学びの質を高める—

B4E12028 島田菜摘

## はじめに

本論の目的は、絵画資料を教材として、「資料読解力」の育成をねらいとした、小学校第6学年の歴史授業を開発することである。

今日の社会科授業では、確かに絵画資料を取り扱った授業は多くみられるが、その使い方に関しては、あまり問題視されてこなかった。そのために、平成28年12月21日に公表された中央教育審議会では、「資料から読み取った情報を基にして、社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である。」<sup>1</sup>という指摘をしている。そして、回答申はこのような事態は児童・生徒の学びの質の低下に起因するとして、以下のような学習指導要領等の枠組みの見直しを打ち立てた<sup>2</sup>。

学びの質を高めるためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である。これが「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善であるが、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである。

これを受け筆者は、社会科の歴史授業開発に先立って、絵画資料を取り上げることにより、次期学習指導要領に則った授業開発ができるのではないかと考えた。なぜならば、「子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す」という点が、「見る」という視点の多様さ<sup>3</sup>と合致しているからである。また、ウェルトハイマーが著書『生産的思考』<sup>4</sup>で論じたように、「思考とは視覚的なものから出発して、それが徐々に論理的に組織づけられる方法をさがしていくということ、すなわち問題解決の仕組み、過程である」の論理に、学習指導要領の見直しの観点と合致するものがあると考えた。

<sup>1</sup> 文部科学省、2016「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」補足資料 pp.35-38

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_4_2.pdf)

<sup>2</sup> 文部科学省、2016「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申) p.26

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)

<sup>3</sup> 吉川幸男は、見るという活動について、学習者が画像に「見ている」内容は、何も視点が与えられなかったときは極めて多様であり、様々な性格をもっていることを明らかにした。吉川幸男、「社会科学習活動組織化の基礎的研究(Ⅰ):「見る」活動の論理と社会科学習」、『教育実践研究指導センター研究紀要』、山口:山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター、1989年、pp.53-57

<sup>4</sup> M. ウェルトハイマー『生産的思考』、矢田部達郎訳、東京:岩波現代叢書、1952年。

具体的な教材には、数ある絵画資料の中でも近現代の資料を取り扱っていくこととする。この時代を取り上げたわけは、佐藤廣の『歴史教育における絵画資料の活用に関する研究』<sup>5</sup>に対して吉田正生が指摘したことに首肯したからである。

吉田はパノフスキーの読解過程を2段階に縮めた佐藤の授業過程では子どもたちをつまずかせると批判したのである。すなわち、パノフスキーは次の3段階——①「自然的意味」の把握段階、「伝習的意味」の把握段階、③「内的意味」の把握段階——により絵画の意味を読み解くことを提唱した<sup>6</sup>のだが、佐藤はこれを授業モデルとして作成した際には、②と③をまとめて示したのである。

これに対して吉田は、②と③をまとめたことに授業者および、学習者をもつまずかせる要因を内包させたと「歴史教育における絵画資料とつまずき」<sup>7</sup>で指摘した。吉田はその理由を、次のように述べている。

佐藤の授業モデルは、「伝習的意味」と「内的意味」の把握を区別しないことによって、授業者に内的意味の把握を目標とさせなくなってしまう可能性がある。

…(中略)…しかも、「内的意味」を把握させるために、これらの伝習的意味は学習者に確実に押さえておかななくてはいけないことなのである。内的意味と伝習的意味とを分節化することによって初めて、学習者にどこまで教え、どこから考えさせるかということが明確になる。授業者の中でこの点が明確になっていないまま授業を行うなら、学習者をつまずかせることになるのである。

つまり、絵画資料を取り扱って「見る」という多様性を重要視しながらも、見たものに対しての推論をさせる際には、その根拠となる「伝習的意味」すなわち、その時代の通説や、今の価値観からでは分からないことは、教師がそれらの知識を教える必要があるということである。

ここから、古代や中世、近世といった時代は、確かにその指摘通りに伝習的意味の取り扱いを丁寧に考えていかななくてはならない。しかし、近現代の資料を取り扱えば、伝習的意味は現代とほとんど差がないため、その場合には佐藤同様に、②と③をまとめても支障がないと考えた。そこで、具体的な時代区分としては、明治時代の激動の日本を取り上げ、日本からの視点以外に海外からの日本の評価や、国際的な立ち位置等を考えさせていくことにする。

次に、人格形成を取り入れた授業プランを作成していくことを明らかにする。これは、先行研究分析を行う中で、これまでに絵画資料を使った授業モデルの中に学問的成果を求めることに止まらず、これから生きる子どもの姿を見出している授業モデルが見つからなかったことにある。それは、平成 29 年 3 月に告示された「小学校学習指導要領 社会」<sup>8</sup>の目標に示された次のことに十分応えていないということになる。

<sup>5</sup> 佐藤廣、『歴史教育における絵画資料の活用に関する研究』、1994 年度兵庫教育大学教科・領域専攻社会系修士論文

<sup>6</sup> パノフスキー 1971 年『イコノロジー研究』、東京：美術出版社、pp. 3-19。

<sup>7</sup> 吉田正生「歴史教育における絵画資料とつまずき」、北海道教育大学教科教育学研究図書編集委員会編『子どもの学びとつまずき』、東京：東京書籍、1997 年、pp.110-122

<sup>8</sup> 文部科学省 2017「小学校学習指導要領解説 社会」p.11

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/04/1387017\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/12/04/1387017_3.pdf)

(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

これを受け筆者は、絵画資料の読み取りから「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握したり」することを達成し、その結果として、児童がこれからの社会を生きる力に生かせるような授業構成を考えていきたい。

以上の理由から、絵画資料を出発として、児童の人格形成に関わることを視野に入れた授業の開発を本論の目的とする。

そこで、本論では次の2観点を取り入れて「資料読解力」の育成をしていく。

- (1) アクティブ・ラーニングの視点（主体的で・対話的な深い学びを獲得させる活動）
- (2) 「人格形成」までを取り入れた単元構成

以下、本論を次のように展開する。まず、黒田日出男の研究をもとに「絵画資料」とはどのようなものなのかについて論じ、その読解手順についてみていく（Ⅰ章）。次に、絵画資料読解を社会科教育に取り込んだ加藤公明・佐藤廣・江間史明の授業実践を考察し、本論の目指す授業像を明確にする。（Ⅱ章）。続いて、授業で取り扱う絵画資料に関する教材研究を行い、「人格形成」までを授業開発に取り入れる意義について関係づけて論じる（Ⅲ章）。最後に、「資料読解力」の育成を目指す、小学校第6学年の歴史分野における「絵画資料」を活用した授業案を作成する（Ⅳ章）。